

独創的な個であり普遍的な作品

日本劇作家協会会員 オペラ「石見銀山」合唱団演技指導

洲浜 昌三

平成29年4月のある朝、電話がありました。「オペラ『石見銀山』の演技をみてほしい」。ええ？オペラを？一瞬、たじろぎました。しかしこの大田で誰も想像しなかった創作オペラという大冒険に挑戦される勇氣に感服しながらもその困難さを思い、少しでも役に立てば、と前向きな返事をしました。

私も演劇には長く関わってきましたが、オペラは異次元の別世界です。夕方400ページ近い脚本が届き、圧倒されました。石見銀山の歴史については本や資料を集めて調べ、脚本を書き、劇研「空」で朗読劇や舞踏劇として上演していましたので、一定の知識はありましたが、再度調べながら、脚本をじっくり読み場面をイメージ化していきました。

次の土、日曜には終日、演出の中村匡宏さんの演技指導のポイントをメモしながら見学しました。指導中に何気なく言われた言葉、「一瞬たりとも観客を飽きさせない」。そこにプロの真骨頂を見ました。楽しい指導でありながら、卓越した演出・指導で舞台空間が目の前で緻密になっていくのを見るのは感動的で得難い経験でした。

脚本は独創的です。このオペラの神楽は「添え物」ではありません。石見神楽・「於紅谷」の原典である「おべに孫右衛門縁起」をベースにして、『銀山旧記』の記述などを豊かなイメージで膨らませ、舞台化されています。殺された孫右衛門と「お高」の怨念、遺恨、呪い、ドロドロとした情念と葛藤、そして魂の浄化と和解—ここでも神楽が象徴的に躍動します。日本古来独特のアニミズム的な救済と和解ですが、西洋の科学的、合理的精神風土で育った人たちにはどのように受け止められるか、とても興味があります。「独創的な個であり、同時に普遍性のあるオペラ」として、西洋の人たちの興味を喚起し魅了する可能性を確信しています。

石見銀山に残っている民謡、「巻き上げ節」「銀堀り歌」「サンヤ節」などが洗練された歌として再生し、魅力的な歌・「らかんさん」「仙の山」が生まれました。公演が終わって数か月過ぎても、ふと曲が頭の中で流れていて困りました。

多忙な中、熱心に練習された合唱団、神楽団の皆さん、演出の吉田さん中村さんと綿密に連絡をとり根気強く指導された指導者の皆さん、更に強力な縁の下の力持ち、スタッフの皆さんに拍手です。レジェンドの皆さんと創り上げたオペラ「石見銀山」は大田の、いや、日本、世界の文化遺産です。

注（この文章は、オペラ「石見銀山」東京公演のパンフレットに掲載されたものですが、字句を追加した箇所があります）

